

# 浅草公園

——或シナリオ——

芥川龍之介



1

浅草の仁王門にあさくさ におうもんの中に吊つた、火のともらない大提灯おほじょうちん。提灯は次第に上へあがり、雑沓ざつとつした仲店なかつみせを見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失せない。門の前に飛びかう無数の鳩はと。

2

雷門かみなりもんから縦に見た仲店。正面にはるかに仁王門が見える。樹木は皆枯れ木ばかり。

3

仲店の片側かたがわ。外套がいのとうを着た男ひとが一人、十二三歳の少年と一しよにぶらぶら仲店を歩いている。少年は父親の手を離れ、時々玩具屋おもちゃやの前に立ち止まったりする。父親は勿論こう云う少年を時々叱つたりしないことはない。が、稀まれには彼自身も少年のいることを忘れたように帽子屋ぼうしやの飾り窓などを眺めている。

4

こう云う親子の上半身じょうはんしん。父親はいかにも田舎者いなかものらしい、無精髭ぶしようひげを伸ばした男。少年は可愛かわいいと云うよりもむしろ可憐な顔をしている。彼等の後ろうしろには雑沓した仲店。彼等はこちらへ歩いて来る。

5

斜めに見たある玩具屋おもちゃやの店。少年はこの店の前に佇たたくんだまま、綱を上つたり下りたりする玩具の猿を眺めている。玩具屋の店の中には誰も見えない。少年の姿は膝の上まで。

6

綱を上つたり下りたりしている猿。猿は燕尾服えんぴかふくの尾を垂れた上、シルク・ハットを仰向けあおむにかぶっている。この綱や猿の後ろは深い暗のあるばかり。

7

この玩具屋のある仲店の片側。猿を見ていた少年は急に父親のいないことに気がつき、きよろきよろあたりを見まわしはじめ。それから向うに何か見つけ、その方へ一散に走って行く。

8

父親らしい男の後ろ姿。ただしこれも膝の上まで。少年はこの男に追いつき、しつかりと外套の袖を捉える。驚いてふり返つた男の顔は生憎田舎者らしい父親ではない。綺麗に口髭の手入れをした、都会人らしい紳士である。少年の顔に往来する失望や当惑に満ちた表情。紳士は少年を残したまま、さつさと向うへ行ってしまふ。少年は遠い雷門を後ろにぼんやり一人佇んでいる。

9

もう一度父親らしい後ろ姿。ただし今度は上半身。少年はこの男に追いついて恐る恐るその顔を見上げる。彼等の向うには仁王門。

10

この男の前を向いた顔。彼は、マスクに口を蔽つた、人間よりも、動物に近い顔をしている。何か悪意の感ぜられる微笑。

11

仲店の片側。少年はこの男を見送つたまま、途方に暮れたように佇んでいる。父親の姿はどちらを眺めても、生憎目にははいらぬらしい。少年はちよつと考えた後、当てもなしに歩きはじめる。いずれも洋装をした少女が二人、彼をふり返つたのも知らないように。

12<sup>三</sup>

めがね  
目金屋の店の飾り窓。近眼鏡、遠眼鏡、双眼鏡、  
廓大鏡、顕微鏡、塵除け目金などの並んだ中に西洋  
人の人形の首が一つ、目金をかけて頬笑んでいる。  
その窓の前に佇んだ少年の後姿。ただし斜めに後ろ  
から見た上半身。人形の首はおのずから人間の首に  
変つてしまう。のみならずこう少年に話しかける。

13<sup>四</sup>

「目金を買つておかけなさい。お父さんを見付けるに  
は目金をかけるのに限りますからね。」

「僕の目は病気ではないよ。」

14<sup>五</sup>

斜めに見た造花屋の飾り窓。造花は皆竹籠だの、  
瀬戸物の鉢だのの中に開いている。中でも一番大き

いのは左にある鬼百合の花。飾り窓の板硝子は少年  
の上半身を映しはじめ。何か幽霊のようにぼんや  
り。

15<sup>六</sup>

飾り窓の板硝子越しに造花を隔てた少年の上半  
身。少年は板硝子に手を当てている。そのうちに息  
の当るせい、顔だけぼんやりと曇つてしまう。

16<sup>七</sup>

飾り窓の中の鬼百合の花。ただし後ろは暗であ  
る。鬼百合の花の下に垂れている苔もいつか次第に  
開きはじめる。

17<sup>八</sup>

「わたしの美しさを御覧なさい。」  
「だつてお前は造花じゃないか？」

18<sup>九</sup>

角<sup>かど</sup>から見た煙草屋の飾り窓。巻煙草の缶<sup>かん</sup>、葉巻の箱、パイプなどの並んだ中に斜<sup>ふた</sup>めに札<sup>ふだ</sup>が一枚懸つてゐる。この札に書いてあるのは、——「煙草の煙は天国の門です。」徐<sup>おもむ</sup>ろにパイプから立ち昇<sup>のぼ</sup>る煙。

19<sup>一〇</sup>

煙の満ち充ちた飾り窓の正面<sup>しょうめん</sup>。少年はこの右に佇<sup>たたず</sup>んでいる。ただしこれも膝の上まで。煙の中にはぼんやりと城が三つ浮かびはじめ。城は Three Castles の商標を立体にしたものに近い。

20<sup>一一</sup>

それ等の城の一つ。この城の門には兵卒が一人銃を持つて佇んでいる。そのまた鉄格子<sup>てつこうし</sup>の門の向うには棕櫚<sup>しゅうろ</sup>が何本もそよいでゐる。

21<sup>一二</sup>

この城の門の上。そこには横にいつの間<sup>ま</sup>にかこう云う文句が浮かび始める。——  
「この門に入るものは英雄となるべし。」

22<sup>一三</sup>

こちらへ歩いて来る少年の姿。前の煙草屋の飾り窓は斜めに少年の後ろに立っている。少年はちよつとふり返つて見た後<sup>のち</sup>、さつさとまた歩いて行つてしまふ。

23<sup>一四</sup>

吊<sup>つ</sup>り鐘<sup>かね</sup>だけ見える鐘楼<sup>しゆろう</sup>の内部。撞<sup>しゆ</sup>木<sup>もく</sup>は誰かの手に綱を引かれ、徐<sup>おもむ</sup>ろに鐘を鳴らしはじめ。一度、二度、三度、——鐘楼の外は松の木ばかり。

24 一五

斜めに見た射撃屋しやげきやの店。的まとは後ろおろに巻煙草まきせんそうの箱を積み、前に博多人形はかたにんぎょうを並べている。手前に並んだ空気銃くわいきじゆうの一行。人形にんぎょうの一つはドレッツスをつけ、扇あふを持った西洋人の女である。少年は怯おず怯おずこの店にはいり、空気銃くわいきじゆうを一つとり上げて全然無分別むふんべつに的まとを狙ねらう。射撃屋しやげきやの店には誰もいない。少年の姿は膝の上まで。

25 一六

西洋人の女の人形。人形は静かに扇あふをひろげ、すっかり顔を隠かくしてしまふ。それからこの人形にんぎょうに中あたるコルクの弾丸たま。人形は勿論仰向けあおむに倒れる。人形の後ろにも暗くらいがあるばかり。

26 一七

前の射撃屋の店。少年はまた空気銃くわいきじゆうをとり上げ、

今度は熱心ねつしんに的まとを狙ねらう。三発、四発、五発、——し  
かしの一つも落ちない。少年は渋しぶぶ渋しぶぶ銀貨ぎんがを出  
し、店の外へ行いつてしまふ。

27 一八

始めはただ薄暗うすくらい中に四角いもの見えるばかり。その中にこの四角いものは突然電燈でんとうをともしたと見え、横よこにこう云う字あがを浮かび上あらせる。——上に「公園六区こうえんろくく」下に「夜警詰所やけいづめしょ」。上あのは黒い中に白、下したのは黒い中に赤である。

28 一九

劇場の裏の上部。火のともった窓が一つ見える。まっ直すくに雨樋あまどいをおろした壁かべにはいろいろのポスターの剥はがれた痕あと。

29 二〇

この劇場の裏の下部。少年はそこに佇んだまま、しばらくはどちらへも行こうとしない。それから高い窓を見上げる。が、窓には誰も見えない。ただ遅しいブルテリアが一匹、少年の足もとを通つて行く。少年の匂を嗅いで見ながら。

30

同じ劇場の裏の上部。火のともつた窓には踊り子が一人現れ、冷淡に目の下の往来を眺める。この姿は勿論逆光線のために顔などはつきりとわからな<sup>もちろん</sup>い。が、いつか少年に似た、可憐な顔を現してしま<sup>かれん</sup>う。踊り子は静かに窓をあけ、小さい花束を下に投<sup>はなたは</sup>げる。

31

往来に立つた少年の足もと。小さい花束が一つ落ちて来る。少年の手はこれを拾う。花束は往来を離れるが早い<sup>はやく</sup>か、いつか茨の束に<sup>いばし</sup>変つて<sup>か</sup>いる。

32

黒い一枚の掲示板。掲示板は「北の風、晴」と云う字をチヨオクに現している。が、それはぼんやりとなり、「南の風強かるべし。雨模様」と云う字に<sup>ま</sup>変つてしま<sup>ま</sup>う。

33

斜に見た標札屋の露店、天幕の下に並んだ見本は徳川家康、二宮尊徳、渡辺華山、近藤勇、近松門左衛門などの名を並べている。こう云う名前もいつの間にか有り来りの名前に<sup>ま</sup>変つてしま<sup>ま</sup>う。のみならずそれ等の標札の向うにかすかに浮んで来る南瓜<sup>かぼちゃ</sup>島……

34

池の向うに並んだ何軒かの映画館。池には勿論電燈の影が幾つともなしに映っている。池の左に立つ



た少年の上半身じょうはんしん。少年の帽は咄嗟とつさの間に風のため  
に池へ飛んでしまう。少年はいろいろあせつた後のち、  
こちらを向いて歩きはじめる。ほとんど絶望に近い  
表情。

35 二六

カツフェの飾り窓。砂糖の塔、生菓子なまがし、麦藁むぎわらのパ  
イプを入れた曹達水ソオダスイのコップなどの向うに人かげが  
幾つも動いている。少年はこの飾り窓の前へ通りか  
かり、飾り窓の左に足を止めてしまう。少年の姿は  
膝の上まで。

36 二七

このカツフェの外部。夫婦らしい中年の男女なんによが二  
人硝子戸ガラスの中へはいつて行く。女はマントルを着た  
子供を抱だいている。そのうちにカツフェはおのずか  
らまわり、コック部屋の裏を現あらわしてしまふ。コッ  
ク部屋の裏には煙突えんとつが一本。そこにはまた労働者か

二人せつせとシャベルを動かしている。カンテラを  
一つともしたまま。……

37 二八

テエブルの前の子供椅子いすの上うへに上半身を見せた前  
の子供。子供はにこにこ笑いながら、首を振つたり  
手を挙げたりしている。子供の後ろには何も見えな  
い。そこへいつか薔薇ばらの花が一つずつ静かに落ちは  
じめる。

38 二九

斜めに見える自動計算器。計算器の前には手が二  
つしきりなしに動いている。勿論女の手には違ちがいな  
い。それから絶えず開かれる抽斗ひきだし。抽斗の中は銭ぜにば  
かりである。

39 三〇

前のカッフェの飾り窓。少年の姿も変りはない。しばらくの後、少年は徐ろに振り返り、足早にこちらへ歩いて来る。が、顔ばかりになった時、ちよつと立ちどまつて何かを見る。多少驚きに近い表情。

40 三三

人だかりのまん中に立つた糶り商人。彼は呉服ものをひろげた中に立ち、一本の帯をふりながら、熱心に人だかりに呼びかけている。

41 三三

彼の手に持った一本の帯。帯は前後左右に振られながら、片はしを二三尺現している。帯の模様は廓大した雪片。雪片は次第にまわりながら、くるくる帯の外へも落ちはじめる。

42 三三

メリヤス屋の露店。シャツやズボン下を吊つた下に婆さんが一人行火に当つている。婆さんの前にもメリヤス類。毛糸の編みものも交つていないことはない。行火の裾には黒猫が一匹時々前足を嘗めてい

43 三三

る。行火の裾に坐つている黒猫。左に少年の下半身も見える。黒猫も始めは変りはない。しかしいつか頭の上に流蘇の長いトルコ帽をかぶつている。

44 三三

「坊ちゃん、スウエエタアを一つお買いなさい。」  
「僕は帽子さえ買えないんだよ。」

45 三三

メリヤス屋の露店を後ろにした、疲れたらしい少

年の上半身。少年は涙を流しはじめ。が、やっと  
 気をとりに直し、高い空を見上げながら、もう一度こ  
 ちらへ歩きはじめる。

46  
三七

かすかに星のかがやいた夕空。そこへ大きい顔が  
 一つおのずからぼんやりと浮かんで来る。顔は少年  
 の父親らしい。愛情はこもっているものの、何か無  
 限にもの悲しい表情。しかしこの顔もしばらくの  
 後、霧のようにどこかへ消えてしまう。

47  
三八

縦に見た往来。少年はこちらへ後ろを見せたま  
 ま、この往来を歩いて行く。往来は余人通りはな  
 い。少年の後ろから歩いて行く男。この男はちよつ  
 と振り返り、マスクをかけた顔を見せる。少年は一  
 度も後ろを見ない。

48  
三九

斜めに見た格子戸造りの家の外部。家の前には  
 人力車が三台後ろ向きに止まっている。人通りはや  
 はり沢山ない。角隠しをつけた花嫁が一人、何人か  
 の人々と一しよに格子戸を出、静かに前の人力車に  
 乗る。人力車は三台とも人を乗せると、花嫁を先に  
 走つて行く。そのあとから少年の後ろ姿。格子戸の  
 家の前に立った人々は勿論少年に目もやらない。

49  
四〇

「XYZ会社特製品、迷い子、文芸的映画」と書い  
 た長方形の板。これもこの板を前後にしたサンド  
 ウイツチ・マンに変わってしまう。サンドウイツチ・  
 マンは年をとっているもの、どこか仲店を歩いて  
 いた、都会人らしい紳士に似ている。後ろは前より  
 も人通りが多い、いろいろの店の並んだ往来。少年  
 はそこを通りかかり、サンドウイツチ・マンの配つ  
 ている広告を一枚貰つて行く。

50 四一

縦に見た前の往来。松葉杖をついた癩兵はいへいが一人  
ゆつくりと向うへ歩いて行く。癩兵はいつか駝鳥だちょうに  
変っている。が、しばらく歩いて行くうちにまた癩  
兵になってしまふ。横町よこぢょうの角かどにはポストが一つ。

51 四二

「急げ。急げ。いつ何時死ぬかも知れない。」

52 四三

往来の角かどに立っているポスト。ポストはいつか透  
明になり、無数の手紙の折り重なった円筒の内部を  
現して見せる。が、見る見る前のようにただのポス  
トに変ってしまう。ポストの後ろには暗のあるばか  
り。

53 四四

斜めに見た芸者屋町。お座敷へ出る芸者が二人あ  
る御神燈ごしんとうのともった格子戸こうしどを出、静かにこちらへ歩  
いて来る。どちらも何の表情も見せない。二人の  
芸者の通りすぎた後、向うへ歩いて行く少年の姿。  
少年はちよつとふり返つて見る。前よりもさらに寂  
しい表情。少年はだんだん小さくなつて行く。そこ  
へ向うに立っていた、背の低い声色遣いっせいひりつかいが一人やは  
りこちらへ歩いて来る。彼の目のあたりへ近づいた  
のを見ると、どこか少年に似ていないことはない。

54 四五

大きい針金の環わのまわりにぐるりと何本もぶら  
下げたかもじ。かもじの中には「すき毛入り前髪立  
て」と書いた札ふだも下っている。これ等のかもじはい  
つの間まにか理髪店の棒まに変ってしまう。棒の後ろに  
も暗のあるばかり。

55 四六

理髪店の外部。大きい窓硝子の向うには男女が何人も動いている。少年はそこへ通りかかり、ちよつと内部を覗いて見る。

56 四七

頭を刈っている男の横顔。これもしばらくたつた後、大きい針金の環にぶら下げた何本かのかもじ、に變つてしまふ。かもじの中に下つた札が一枚。札には今度は「入れ毛」と書いてある。

57 四八

セセツション風に出来上つた病院。少年はこちらから歩み寄り、石の階段を登つて行く、しかし戸の中へはいつたと思うと、すぐにまた階段を下つて来る。少年の左へ行つた後、病院は静かにこちらへ近づき、とうとう玄関だけになつてしまふ。そ

の硝子戸を押しあけて外へ出て来る看護婦が一人。看護婦は玄関に佇んだまま、何か遠いものを眺めている。

58 四九

膝の上に組んだ看護婦の両手。前になつた左の手には婚約の指環が一つはまつている。が、指環はおのずから急に下へ落ちてしまふ。

59 五〇

わずかに空を残したコンクリイトの塀。これもおのずから透明になり、鉄格子の中に群つた何匹かの猿を現して見せる。それからまた塀全体は操り人形の舞台に變つてしまふ。舞台はとにかく西洋じみた室内。そこに西洋人の人形が一つ怯ず怯ずあたりを窺っている。覆面をかけているのを見ると、この室へ忍びこんだ盗人らしい。室の隅には金庫が一つ。

60 五二

金庫をこじあけている西洋人の人形。ただしこの人形の手足についた、細い糸も何本かははつきりに見える。……

61 五二

斜めに見た前のコンクリートの塀。塀はもう何も現していない。そこを通りすぎる少年の影。そのあとから今度は背むしの影。

62 五三

前から斜めに見おろした往来。往来の上には落ち葉が一枚風に吹かれてまわっている。そこへまた舞い下つて来る前よりも小さい落葉が一枚。最後に雑誌の広告らしい紙も一枚翻つて来る。紙は生憎引き裂かれているらしい。が、はつきりと見えるのは「生活、正月号」と云う初号活字である。

63 五四

大きい常磐木の下にあるベンチ。木々の向うに見えるのは前の池の一部らしい。少年はそこへ歩み寄り、がっかりしたように腰をかける。それから涙を拭いはじめる。すると前の背むしが一人やはりベンチへ来て腰をかける。時々風に揺れる後ろの常磐木。少年はふと背むしを見つめる。が、背むしはふり返りもしない。のみならず懐から焼き芋を出し、ががつしているように食いはじめる。

64 五五

焼き芋を食っている背むしの顔。

65 五六

前の常磐木のかげにあるベンチ。背むしはやはり焼き芋を食っている。少年はやつと立ち上り、頭を

垂れてどこかへ歩いて行く。

66  
五七

斜めに上から見おろしたベンチ。板を透かしたベンチの上には墓口がまくちが一つ残っている。すると誰かの手一つそつとその墓口をとり上げてしまう。

67  
五八

前の常磐木のかげにあるベンチ。ただし今度は斜めになっている。ベンチの上には背むしが一人墓口の中をしら検べている。そのうちにいつか背むしの左右に背むしが何人も現れはじめ、とうとうしまいにベンチの上は背むしばかりになってしまう。しかも彼等は同じようにそれぞれ皆熱心に墓口の中をしら検べている。互に何か話し合いながら。

68  
五九

写真屋の飾り窓。男女の写真が何枚もそれぞれ額縁がくぶちにはいつて懸かつている。が、それ等の男女の顔もいつか老人に変わってしまう。しかしその中にたった一枚、フロック・コオトに勲章をつけた、鬚あごひげのある老人の半身だけ是不変。ただその顔はいつの間にか前の背むしの顔になっている。

69  
六〇

横から見た観音堂かんのんどう。少年はその下を歩いて行く。観音堂の上には三日月みかつきが一つ。

70  
六一

観音堂の正面の一部。ただし扉とびらはしまっている。その前に礼拝らいはいしている何人かの人々。少年はそこへ歩みより、こちらへ後ろを見せたまま、ちよつと観音堂を仰いで見る。それから突然こちらを向き、さつさと斜めに歩いて行ってしまふ。

71 六二

斜めに上から見おろした、大きい長方形の手水鉢。  
柄杓が何本も浮かんだ水には火かけもちらちら映つ  
ている。そこへまた映つて来る、憔悴し切つた少年  
の顔。

72 六三

大きい石燈籠いしとうろうの下部。少年はそこに腰をおろし、  
両手に顔を隠して泣きはじめる。

73 六四

前の石燈籠の下部の後ろ。男が一人佇たなずんだまま、  
何かに耳を傾けている。

74 六五

この男の上半身。もつとも顔だけはこちらを向い

ていない。が、静かに振り返つたのを見ると、マス  
クをかけた前の男である。のみならずその顔もしば  
らくの後、少年の父親に変わってしまう。

75 六六

前の石燈籠の上部。石燈籠は柱を残したまま、お  
のずから炎ほのおになって燃え上つてしまう。炎の下火したびに  
なつた後、そこに開き始める菊の花が一輪。菊の花  
は石燈籠の笠よりも大きい。

76 六七

前の石燈籠の下部。少年は前と変りはない。そ  
こへ帽を目深まぶかにかぶつた巡查じゆんさが一人歩みより、少年  
の肩へ手をかける。少年は驚いて立ち上り、何か巡  
査と話をする。それから巡查に手を引かれたまま、  
静かに向うへ歩いて行く。

77 六八



前の石燈籠の下部の後ろ。今度はもう誰もいな  
い。

六九  
78

前の仁王門におうもんの大提灯おおじょうちん。大提灯は次第に上へあがり、前のように仲店なかみせを見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失うせない。

(昭和二年三月十四日)

後註

- 一 [10] は縦中横
- 二 [11] は縦中横
- 三 [12] は縦中横
- 四 [13] は縦中横
- 五 [14] は縦中横
- 六 [15] は縦中横

- 七 [16] は縦中横
- 八 [17] は縦中横
- 九 [18] は縦中横
- 一〇 [19] は縦中横
- 一一 [20] は縦中横
- 一二 [21] は縦中横
- 一三 [22] は縦中横
- 一四 [23] は縦中横
- 一五 [24] は縦中横
- 一六 [25] は縦中横
- 一七 [26] は縦中横
- 一八 [27] は縦中横
- 一九 [28] は縦中横
- 二〇 [29] は縦中横
- 二一 [30] は縦中横
- 二二 [31] は縦中横
- 二三 [32] は縦中横
- 二四 [33] は縦中横
- 二五 [34] は縦中横
- 二六 [35] は縦中横
- 二七 [36] は縦中横
- 二八 [37] は縦中横
- 二九 [38] は縦中横
- 三〇 [39] は縦中横

三一	[40]	は縦中横	五五	[64]	は縦中横
三二	[41]	は縦中横	五六	[65]	は縦中横
三三	[42]	は縦中横	五七	[66]	は縦中横
三四	[43]	は縦中横	五八	[67]	は縦中横
三五	[44]	は縦中横	五九	[68]	は縦中横
三六	[45]	は縦中横	六〇	[69]	は縦中横
三七	[46]	は縦中横	六一	[70]	は縦中横
三八	[47]	は縦中横	六二	[71]	は縦中横
三九	[48]	は縦中横	六三	[72]	は縦中横
四〇	[49]	は縦中横	六四	[73]	は縦中横
四一	[50]	は縦中横	六五	[74]	は縦中横
四二	[51]	は縦中横	六六	[75]	は縦中横
四三	[52]	は縦中横	六七	[76]	は縦中横
四四	[53]	は縦中横	六八	[77]	は縦中横
四五	[54]	は縦中横	六九	[78]	は縦中横
四六	[55]	は縦中横			
四七	[56]	は縦中横			
四八	[57]	は縦中横			
四九	[58]	は縦中横			
五〇	[59]	は縦中横			
五一	[60]	は縦中横			
五二	[61]	は縦中横			
五三	[62]	は縦中横			
五四	[63]	は縦中横			

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 3 月 24 日第 1 刷発行

1993（平成 5）年 2 月 25 日第 6 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998 年 4 月 20 日公開

2004 年 3 月 7 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。